

ゆにゆに

UNIVERSITY UNION

2009年7月1日

通巻1109号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会
〒920-1192 金沢市角間町
TEL076-262-6009 角間内線2105
E-MAIL kanazawa@ku-union.org



金沢大学版

地球の歩き方

〈ニュージーランド旅行記〉

山本 卓 (人間社会学域)

3月にニュージーランドに一週間ほど滞在しました。これまでニュージーランドといっても羊とキーウィくらいしか思い浮かばなかったのですが、南太平洋の島嶼文学を読むうちに、かの地域ではかなりの影響力を誇っている国ということを知りました。たとえばトンガ人作家エベリ・ハウオファの『おしりに口づけを』(岩波書店)という小説では、島国ティボタで痔瘻に苦しむ主人公のために、友人の巡査がニュージーランド高等弁務官に以下のような嘆願書を出します。

目下わたしたちは貧しく、わたしたちの病院もよくありません。(中略)先生が言われるにはニュージーランドへ行ったほうが良いとのこと。しかし、わたしたちにはニュージーランドへ行く金がありません。あなた様方にはわたしたちをそちらの病院へ送るだけの金がたんまりあると聞いております。仲間のひとりだけでいいので、彼を助けていただきたいのです。(195)



アルバート公園

中心部にあるアルバート公園は熱帯の植物とイギリス式の庭園で整えられたエキゾチックな作りです。その隣にあるオークランド大学はニュージーランドでもっとも古い歴史を誇るため、その蔵書は見るべきものがありました。その一方で、コンピューター管理が行き届いたハイテク大学でもあり、何をしてもログインIDが必要でした。昼食を取りに通りに出ると、フレンチ、イタリアン、アメリカン、チャイニーズ、コリアン、ジャパニーズとよりどりみどり。なぜか寿司のテイクアウトとラーメン屋はいたる所がありました。イギリス連邦の国なので、パブも昼間からにぎわっています。チーズと肉製品は濃厚な旨味があって、ビールのつまみには最高でした。

この小説は基本的に喜劇仕立てなので、この引用もギャグの部分割り引いて考える必要があるのですが、他のもっとまじめな小説を読んでも、ニュージーランドへの憧憬は特筆すべきものがあります。脱植民化したもののこれといった産業もない南太平洋の人々には、ニュージーランドは植民地時代を思い起こさせる白人の国であると同時に、経済的に恵まれた憧れの国らしいのです。羊とキーウィの何が一体そんなにいいんだ? という私の素朴な疑問を解決するための旅行でありました。

結論から申し上げますと、大変素晴らしい国でした。ニュージーランド最大の都市オークランドはサンフランシスコをもっと綺麗にこぢんまりとしたような街で、歩けばすぐにハーバー。



ハーバー



ラーメン屋



道 路

このままでは羊とキーウィに完敗してしまう（意味不明）と思い、旅の最終日にレンタカーを借りて郊外に出ました。まず驚いたのが、速度制限が市街地の50km/hと郊外の100km/hだけということです。オークランドの周辺は片道3車線の高速道路なのですが、それ以外はほとんどが対面通行。でも制限速度は100km/hです。すこし市街地に近いところに来ると、横を歩いているにも関わらず、みなさん100km/hくらいで飛ばします。慣れない外国人旅行者の私は怖くてスピードが出せません。ここでも負けました。

所々にある観光スポットで途中休憩をしながら、景色を満喫するのですが、悔しいことにこれがまた素晴らしい。そもそも日本の3/4の面積に500万人しか住んでいないので、どこへ行っても原生林となだらかな丘陵の景色が続きます。

オークランドから3時間ほどしてやってきたのは、ワイタンギというほぼ北端の街です。ここでは160年ほど前、先住民であるマオリとイギリスの間で土地割譲（実際は植民地化）の条約が調印されました。現在は記念館と記念碑が建てられていて、

観光名所になっているだけのことはあり、海を望む素晴らしい（何回目でしょうか）ロケーションです。また、ニュージーランドの歴史の紹介もマオリの視点に立って解説されており、民族共生の姿勢を印象づけるものでした。そういえばワイタンギに限らず、どんな場所にも英語の標識の下にはマオリ語が併記されていました。「長き白雲の国」というニュージーランドの別称も、マオリ語のAotearoaを訳したものです。マオリから土地を奪ったヨーロッパ人は前世紀の終わり頃から、マオリ民族の独自性を認め、ともにニュージーランドを創っているとしています。

しかしながら、ニュージーランドには南太平洋諸島から多くの移民が訪れ、永住する人も少なくありません。また、最近都市部で急速に増えているアジア系の人々は今後どうなるのでしょうか？将来のニュージーランドは、民族の混交した多文化地域モデルとなるのでしょうか？ということを考えながら、オークランドへの帰路につきました。スピードにも慣れ、快調なドライブでした。

後日談。先日、ニュージーランドからビジネスレターが来ました。開けてみると、警察からのスピード違反の告知。罰金付き。トホホ…。あとで調べたところ、とてもスピード違反に厳しい国らしいですね。最後まで羊とキーウィに負けっぱなしのニュージーランド旅行でした。



ワイタンギ



ワイタンギ



郊外の公園

私の健康法

井原 朋美 (理工学域)

私が学生時代からずっと続けてきている事に、「茶道」があります。行儀作法の一つとして始めたことでしたが、長く続けるうちに、だんだんその魅力に引き込まれて行きました。

季節ごとのしつらえ、お茶室の静寂の中に聞く「松風の音」、焚かれた香、炭、お茶のかおりなど、全てが五感を刺激し、心を鎮めてくれます。炭が綺麗にうつると、いい具合に釜の中でお湯が動いて、「とろん」とした感じにお湯が練れてきます。そして、その湯で点てたお茶を頂きます。ふわっとした苦みから、次第にほんのりとした甘味に変わっていくのが、たまらなく美味しいのです。



茶道はとても楽しいものです。季節とともに、その姿を変えていきます。夏は涼しく、冬は暖かく…お茶会では、亭主は心

からのおもてなしをするために、お急ぎのお客様のためには、お手前を省略するなど、とても臨機応変なところがあります。茶人の心遣いから、自然に生まれてきたことだと思います。

このように、茶道を通じて、多くのことを学ぶとともに、素敵なお人達とも巡りあいました。伝統を受け継ぐ職人の技と魅力に触れながら、友人たちと訪ねた窯元、ガラス工房、漆芸工房、菓子工房…。お仕事中に手を止めて、いろいろとお話しして下さる職人さんたちは、清々と輝いていて、とても魅力的でした。そして、ひとつの道を究めている人の芯の強さを感じました。



私も、手作りのお茶碗で点てたいと思い、陶芸教室に通っていた時期がありました。不格好で、人目に触れさせられるような物ではないのですが、「手作り」というだけで、愛着が湧き、お点前がとても楽しくなります。茶碗・水差し・花入れ…と、ある程度のお道具が揃ったので、今は休憩中ですが、時間に余裕ができれば、再開したいと思っています。そして、今は茶道が長く続けられるように、ヨガをしています。想像以上に、茶道の立ち居振る舞いには、体力が必要なのです。

今まで、「いつも元気で良いね!」と言われることが多く、健康に気を配らなければならない年齢ということ、あまり意識しないで過ごしてきました。でも、もしも私が「健康(そう?)」に映るとしたら、それは、「楽しい茶道」を続けているお陰かも知れません。



益川敏英先生インタビュー顛末記

村井 淳志 (人間社会学域)



『全大教新聞』4月号をご覧下さった方はご存じの通り、私は先日、益川敏英先生にインタビューする機会を得ました。ノーベル賞受賞者にインタビューするチャンスなんて、もう二度と来ないでしょう。そんな希有な体験の顛末を御紹介したいと思います。

昨年のノーベル物理学賞の受賞者である益川敏英先生が、かつて京都大学で教職員組合の書記長をされていたという話は、受賞直後すぐに、京大の組合からもたらされました。マスコミの報道やインタビューを見ていると、益川先生の反骨精神が、ユニークなキャラクターとともに伝わってきます。全大教情宣部はただちに、4月発行の新人歓迎号の巻頭を益川先生インタビューで飾ろう、と決めました。新年号では小柴先生に登場していただいたので、ノーベル賞受賞者インタビュー第二弾、というわけです。

さっそく京大関係者を介して益川先生に申し入れ、2月ならと、快諾をいただきました。インタビュアーは、小柴先生にもインタビューした全大教委員長の高木正見さん(九州大学、専門は農学)の予定でした。ところが益川先生があげられた日、高木さんはどうしても本務の仕事ははずせず、

やむなく副委員長である私にお鉢が回ってきたわけです。理系の高木さんならともかく、私に務まるはずはないと固辞したのですが、他に適当な人も見つからず、せっかくインタビューを快諾していただいたのに、こちらの都合でキャンセルなんてとんでもない!ということで、とうとうお引き受けすることになりました。ちなみに私、純粋文系人間というだけではなく、物理学は中学校の時に落ちこぼれて以来、電気の直流と交流の違いもよくわからない、という極端な物理学オンチです。受験も生物の暗記で何とかかんとか乗り切ったクチですから。CP対称性の破れだの、クォークが6個だの、まったくちんぷんかんぷんです。

すぐに、にわか勉強をはじめました。立花隆が『小林・益川理論の証明』(朝日新聞社)という本を出していることを知り、これ幸いと読みました。この本、大変よくできています。高エネ研のBファクトリー(B中間子を大量発生させ、実際に「CP対称性の破れ」を観測するための装置)の実験をリアルタイムで伴走した記録と、今回の受賞を受けての高エネ研関係者の座談会を掲載しています。次に読んだのが、南部陽一郎さんの『クォーク』と小林誠さんの『消えた反物質』(ともに講談社ブルーバックス)。これでだいたいのアウトラインはつかめました。

次に11月~2月の新聞・雑誌のインタビューを集めました。益川先生も、同じことを何度も聞かれるのはご不快だろうと思い、なんとか、これまでのインタビューでは取り上げられていない論点はないか、搜しました。

その結果、核心にしようと思ったのは、次の質問です。

- なぜ72年段階で、小林・益川は「正解」にたどり着くことができたのか、逆になぜ、他の物理学者にはそれができなかったのか。
- 小林・益川へのノーベル賞授与は遅かったのか。だとしたらなぜ遅れたのか。遅くないとするならその理由は。

最後に、理学部の末松大二郎さん(素粒子物理学)に、1時間、レクチャーをお願いしました。これが決定的に役立ちました。やっぱり人から話を聞くのは、本を読むのとはまったくちがう風通しの良さで情報が入ってくるものです。私のような物理オンチに講義するのはさぞ大変だったろうと思いますが、末松さんは丁寧かつにこやかに、教えてくれました(末松さん、ありがとう!)。本番のインタビューで私が聞いた「トーフトが1971年に“場の理論でも繰り込み可能”と証明した時点で、なぜ多くの物理学者は場の理論が使えると、気づかなかったのでしょうか」という(聞いている本人が全然意味をわかっていない)質問は、末松レクの賜物です。末松さんからは、小林・益川理論の原文(京大基礎研機関誌プロGRESS掲載の英文論文)をコピーしていただきました。

質問の骨格が固まったらずいぶん落ち着きました。この二つで30分くらいはかかるでしょう。あとは組合のインタビューらしく、教職員組合の活動のこと、現在の国立大学の研究費のことを聴き、最後はご出身の名古屋の話題(私も名古屋出身である)で締めようという段取りを考えました。

当日は、録音・写真係を担当してくれた全大教書記次長のT氏と京都市地下鉄烏丸線の北山駅改札で待ち合わせ。雨の中、タクシーで京都産業大学に向かいました。京産大のキャンパス入り口には「祝・益川敏英先生ノーベル物理学賞受賞」という、どでかい横断幕が掲げられていました。T氏の話では、京産大はこの春、受験生が前年比3割も増えたとか。思わぬノーベル賞効果です。広報担当の女性もすっかり取材慣れされていて、別室でしばらく待機したあと、いよいよ益川研究室に通されました。

益川先生の第一印象は、テレビで見るよりもずっと柔和な方だな、というものです。眼鏡を外しておられたせいも、いかつい感じがまったくありません。小柄で、ちょっと太られたかな、とも思いました。インタビューしている間は、緊張でガチガチ、時間を間違えるほどでしたが、無事、終了することができました。

最初の質問の答え。当時ほとんど全部の物理学者は「場の理論」が使えないと予想していたが、益川先生はクォーク数を3から4に増やせば「CPの破れ」証明の困難さが軽減されるという論文に注目していたこと、トーフトの繰り込み可能証明が出てますます場の理論へのこだわりにも自信をもったこと、半年後に小林さんが京大に赴任してきたので、「破れ」に取り組んでみたがどうもうまくいかない、それならクォーク4個じゃ絶対ダメだ、という論文を書こうと決断したとたん、6個モデルを着想したということだった。

第二の問いの答えは、「遅くない」。「我々はクォークが6個あるということだけじゃなく、その振る舞い方まで書いたのだから、それがBファクトリーで証明されて5年ほどというのはちょうどよい。大型実験は検証が難しいので、しばらくフィールドに晒しておいて、どこからも文句が出なかつたら、それで確定。2008年はまさにそういうタイミングです」とのことでした。

インタビュー終了後、T氏が謝金をお渡しすると、益川先生は封筒を手にして「ハイ、確かに頂きました。じゃ、これ、全大教にカンパ」と封筒をT氏に返しました。領収証にサインした上です。「いや、それではあんまり…」と申し上げても、もう、受け取ろうとはされませんでした。



おやすめの♪

ちよっせいは店

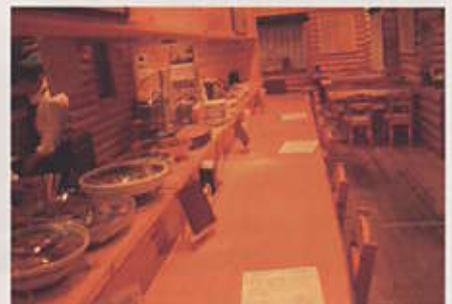
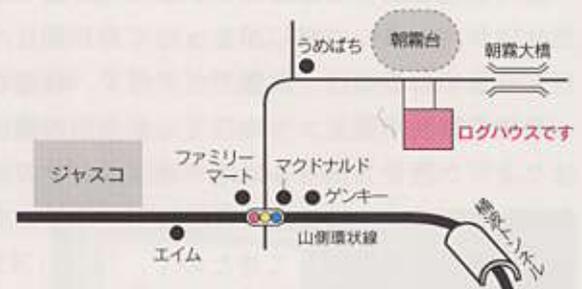
浅川村のおばんざい
せんな
渡辺 誓代(附属幼稚園)

家庭的なおばんざいをログハウスでいただくのが、せんなスタイルです。ご飯は地元の「犀滝の香」を毎日精米、おしぼりやお箸はリユース、食事のお客様への野菜販売等、ほどほどのこだわりで開店して2年半になります。これまでに、ランチタイムで利用された方もいらっしゃるでしょうか。土日も平日も価格は同じで、人気の十品盛(写真)1,280円、おばんざい定食680円です。

でも、実は夜の時間が穴場なのです。周辺は新興住宅地で、夜はとても静か。その中で、せんなのほのかな明かりが「食べにおいでよ～」と誘っています。「せんな定食」と「おばんざい定食」(各1,000円)でご飯するもよし、おばんざいを肴に飲むもよし。食後は、アイスにバルサミコ酢やしょうゆをかけていただくなど、ゆっくりと話しながら楽しむことができます。

おばんざいは、魚の南蛮漬け・豚の角煮・筑前煮・高野豆腐の煮物・おから・きんぴら・肉じゃが・なます・鶏ハム・塩さば・ピリ辛茱萸・牛すじの煮込み…などなど常時30種ほど。畑で採れた珍しい野菜のおばんざいが登場することもあります。このおばんざいがカウンターの大鉢に並んでいますので、是非カウンターでチョイスしてくださいね。

場所は山側環状線、杜の里近辺。金沢大学のどのキャンパスからも比較的近いですよ。飲んで代行で帰っても、お得な場所です。是非お立ち寄りください！



住所：金沢市田上本町土地区画整理事業地70街区17

駐車場：16台

営業時間：11:30～14:00 18:00～22:00(ラストオーダー21:30)

電話：224-1007

火曜定休 月曜はランチタイムのみ

〇〇〇編集後記〇〇〇

この時期になると早起き生活にシフトします。朝3時頃に起きると既に空は白んでいますが、気温は低く、窓を開けるとさわやかな空気が入ってきます。外を通る車や人もほとんどいないので、とても静かです。当然、仕事もはかどります。一仕事終えてコーヒーを飲んでいる頃によく町中がにぎわってきます。新聞を読みながら朝食を摂っても、まだ7時。1限目の授業にも余裕です。すばらしい早起き生活！唯一の問題は会議です。何かの拍子に睡魔が襲ってくると、それはそれは手強い敵となります。

(編集者Y)